

かなばかりの文は幼児にはわからない

「うちの子は本を少しも読みたがらない」と言って多くのお母さんが嘆きます。調べてみると、その子どもたちが与えられているのは、たいてい、内容は豊かですが、かなばかりの本です。

どなたもご存知でしょうが、かな文字ばかり並んだ文章は、おとなにさえ、わかりにくく、めんどうなものです。まして抽象的な意味がわかりにくいかなが幼少の子どもたちに喜ばれるはずがないのです。事実、わたしどもがやっている漢字による教育を受けた子どもたちは、すでに小学一年生にして、かなばかりの本は読みにくくて、読む気になれない、とっております。

これは、読書人を増大していかなければならないはずの出版社が、みずから減退させる大役を買っているようなものです。そして、そのことに気づいていても、第二章の3に述べたように、編集の人は「どんなに良い本でも、買ってもらえなければ、作るわけにいかない」のですから、買う方にも大いに責任があることとなります。つまり、日本中のお母さん方が、「かな書きの本などいらぬ。みんな漢字かな混じ

り文にしてほしい。そうでなければ買わない」というところまでいかなければならないでしょう。

ところで、漢字かな混じり文なら楽しく読める、と言っても、それは漢字が読める上での話です。漢字が読めないことには、かなばかりの本よりも、手がつけれません。つまり、お母さんの読むお話を聞いて育った幼児が、自分でそのお話を読んでみたい、という気持ちを起こす以前に、漢字を読む力を養っておくことがどうしても必要です。

そこで次に、漢字の与え方を考えましょう。